

CASE STUDY

Genelec 8381Aがオーディオ評論家の「絶対的リファレンス」へ

小原由夫氏 導入インタビュー

権威あるアワードの審査員も務めるオーディオ評論家が、8381Aをリファレンスに迎えたその理由に迫る。





生き物と対峙しているような生身の感触

— 今回、17年にわたり愛用なさっていたリファレンス・スピーカーから、8381Aを導入いただきました。まずは、オーディオ評論家として、また一人の音楽ファンでもある小原先生が、リファレンス・スピーカーに求めるスピーカー像をお聞かせください。

私にとって「リファレンス」とは、文字通りの「基準」です。それも、揺るぎない基準。プログラム・ソースに含まれる情報を細大漏らさず再現することはもちろん、それを脚色も湾曲もしない。そういう音がリファレンス足り得ると私は思っています。

そこには忠実性も求められるし、信憑性も必要でしょう。そうすると、測定的なイメージを持たれるかもしれませんね。確かにスタジオ・モニターにはそうした側面も要求されると思います。しかし、8381Aを初めて聴いた時、それだけではないファクターを感じたんですね。何というか、生命感というか、躍動感というか。生き物と対峙しているような生身の感触を音から感じました。

私もかつては好きなジャズを浴びるように聴くことが楽しみでした。10帖弱の部屋にエレクトロボイスのシアター用大型スピーカーを持ち込んでいたこともありましたが。でも、仕事を通じて色々な音楽を聴いていくうちに、少しずつ志向が変わってきました。簡単に言えば、音像追求から、俯瞰的な音場志向に変わっていったようなイメージを持っています。

一方で、80年代から00年頃にかけて、音楽の作り方もドラスティックに変わってきたでしょう？ 特にここ20年ぐらいの音楽の作られ方、特に低音の対処、進歩には凄まじいものがある。

そうなってくると、モニター・スピーカーの在り方も変わってきて当然と思うし、それを最も真摯に突き詰めて取り組んできたのが Genelec であると常に感じていました。



しかし、流石にスタジオ・モニターを自宅に入れるところまで、まだ気持ちが傾いていなかった。なんせ、TAD Reference Oneの音にゾクコンでしたからね。ここしばらくは。

TADに教えられたのは、シンプルに言えば「見える音」。演奏現場の空気感、臨場感と共に、演奏家同士の距離感や、音像のレイアウトの置き方、そういったものがステレオ・イメージの中にレイヤーを伴って広がり、そこにパースペクティブ（遠近感、奥行き感）が現れる。私が今スピーカーに真っ先に求めるのは、そうしたパースペクティブを含めた音場のレイヤー感の忠実な再現と言い切ってもいいでしょうね。それが先ほど言った、俯瞰的な音場志向になるわけです。

こんなに鮮度の高い音なのに どれだけ音量を上げてても崩れない

— リファレンス・スピーカーを入れ替える、ということは相当な決断だったと思います。そこまでの決断に至るまでの経緯を教えてくださいませんか？

メディアのレビュー取材で池尻大橋のスタジオ prime sound studio form に出向き、そこで 8381A を聴いてレビューを書いてくださいと依頼されたのが、奈落の底につき落とされることになった（笑）、そもそもの発端です。正直にお話すると、出掛けて、音を聴いて、その印象を書くという単純作業的なお仕事という認識でした。まさかそれがこんなオオゴトになるなんて、まったく想像もしていなかった。だって、さっきお話しするように、私は TAD Reference One に惚れ込んでましたから。

8381Aの第一印象は、「なんだこの見た目は!？」でしたよ。特にトップ・エンクロージャの4基のドーム型スコーカーの辺りとかね。しかもあの真っ黒で無骨なデザインでしょ。

でもね、そこで鳴っていた音に雷打たれちゃったんですよ。こんなに鮮度の高い鮮烈な音なのに、どれだけ音量上げてても崩れないし、兎にも角にも、うるさくない。低音も圧倒的な深みとスピード感で、ダルな振る舞いがまったくない。「エッ、これって38cmが3基鳴っているんでしょ、どーして？」って感じですよ。そこには、私が今スピーカーに希求するすべての要素がほぼ満遍なく備わっていたわけです。

で、帰宅してもその時の音が耳にこびりついて離れない。自宅で TAD を聴いていても気もそぞろ。「あの音をこの部屋で鳴らしたらどうなるんだろう」という妄想がどんどん膨らんでしまって。その妄想がやがて煩惱に変わって……（笑）。そこから体力的にも精神的にも、今だったらまだ新しいスピーカーを迎え入れることはできるって、高ぶっちゃった。でも5年後10年後は難しいかもしれない。そう考え始めたら、居ても立ってもいられなくなってしまって。そこでジェネレックジャパンにコンタクトしたわけです（笑）。その後の顛末は、ぜひ PHILE WEB や HIMI に寄稿した導入記¹をご覧ください。

先ほどお話ししたように、音楽の作り方が近年変わっていく中で、最も大きく変わったのは、低音の捉え方だと思うんです。クイックな低音が、強靱なエネルギーを有しながら軽々と再現できるようになった。となると、ウーファーには以前にも増してリアリティが要求される。前後のピストニックモーションの正確な追従性を求めた時、大口径ウーファーでは不利な要素がたくさんある。その対処法として、30cm以下の振動板を使ったドライバー・ユニットを複数個使って面積を確保して、大口径ウーファーに匹敵する空気量をしっかりグリップしてエネルギーを確保し、なおかつリアリティはしっかり追従できている。近年そうした考え方に基づく複数ウーファー搭載のスピーカー・システムが多いのは、そんな潮流からであるのは間違いないと思います。

一方で、微細な描写力、それは分解能と言い換えられるけれど、そうした要素も非常

“

今スピーカーに
希求するすべての要素が
ほぼ満遍なく
備わっていたわけです

小原由夫
オーディオ評論家



¹
PHILEWEB - 小原由夫氏がジェネレック「8381A」を導入した理由。「圧倒的なリアリティ、なんという鮮烈さ！」
<https://www.phileweb.com/review/article/202603/06/6425.html>

HIMI 2026 年春号
<https://www.stereosound-store.jp/c/book/hv2026spring>

に高くなってきた。これはハイレゾの普及と密接に関わっていると思いますが、CDの44.1kHz/16ビットの領域から飛躍的に情報量が上がって、さらに位相制御もより精密にコントロール可能になって、スピーカーのデザインが変わってきました。例えばフロント・バッフルをよりスリムにして、反射や回折現象を極力抑えるようにした設計が近年主流になってますよね。これはさっき言ったウーファの小型化とも密接にリンクしているわけです。その代わりに、エンクロージャの側面に大型ウーファを搭載するとかね。

こうした変化があるなかで、スタジオ・モニターとしてその在り方を突き詰めて形にしたのが、この8381Aだと思うのです。何より証拠に、スタンド・アロンでしょ、このスピーカーは。一般的にスタジオで壁に埋め込まれるラージ・モニターのカテゴリになるスピーカーでありながら、あえて埋め込まずフリー・スタンディングでの自由な設置を可能としたことは、この反射や回折現象を分析した成果とは決して無関係ではないと思っています。

— 小原先生のリスニング・ルームはオーディオのために設計されたお部屋とお聞きしました。スピーカーを鳴らすための空間については、どのようにお考えですか？

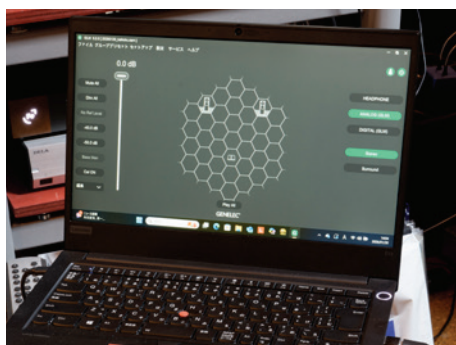
私は、いい音を出すための条件としては、オーディオ・システム半分、部屋半分という考えです。つまり、どんなに優れたオーディオ機器を揃えたところで、鳴らす環境が整っていなかったら宝の持ち腐れだと認識しています。だから私は20年前にこの仕事部屋を作る際、住宅音響建築の専門業者に依頼して、それなりにしっかり予算を組んでルーム・アコースティックや、防音・遮音性能を綿密に検討してもらい、私の要望も入れてもらって部屋を作りました。結果的には採取したデータも良好で、大変満足しています。

でも、それでも色々家具調度品が入っていく過程で、反射や吸音作用は発生し、それは決して避けられない。特に低域の定在波は厄介なもののひとつでしょうね。この点を Genelec のスピーカー・マネージメント・ソフトウェア GLM のキャリブレーション機能によって、解決できていると思います。GLM ソフトウェア自体は無償で提供されていますし、Genelec の SAM (Smart Active Monitor) スピーカーであれば、測定用マイクロホンがセットとなった GLM Kit を手に入れるだけですぐに使えます。8320A や 8330A であればバンドル・パッケージも発売されていますので、一度は試されることを私からもお勧めしますよ。目から鱗は私が保証します。低域の解像感と見通しが俄然改善されます。

— 8381A に付属する 9320A SAM リファレンス・コントローラーは、どのように活用なさっていますか？

私はサラウンドに関するレビューも行いますので、今回リア ch に 8351B を導入しています、9320A を使えば、我が家の場合、物理的かつ瞬時にステレオ再生とサラウンド再生を切り替えられるのがいいですね。3本の8381Aをスクリーン・チャンネルとして、リアの8351Bを2本、音圧を揃え、室内音響補正も、ステレオとサラウンドそれぞれの設定をGLMで整えた状態で、ピュア・オーディオとホームシアターが構築できたことに感激しています。今後はスクリーンを上げた状態で、音楽物のサラウンド・コンテンツ用にもうひとつのグループを作って、サウンド・スクリーンを下ろした状態のキャリブレーション・データと使い分けるようにする予定です。キャリブレーションにかかる時間も非常に速いので、こうした複数のデータを測定することも苦になりません。

測定データを瞬時に呼び出して反映できる点にも、スタジオ・モニターとして長い実績に裏付けられた Genelec ならではのオリジナリティを感じます。時間単位で稼働し、その結果がコストに反映されるのがスタジオ仕事ですから、タイム・フォー・マネーという点から効率も勘案しなければなりませんからね。





自分の耳に狂いはなかった

— 8381A は、小原先生の「リファレンス」としてのご要望にお応えできていますか？

まず、「リファレンス」とは、読者から見て、ある種普遍的でなければならない。つまり、その人の評文を読んで、この人はこのスピーカーを使い、このアンプで鳴らして、それで「こういう評価なのか、フムフム……」とイメージできなきゃダメだと思うんですね。読者から信用足りうる感覚を持ってもらう条件として、信用できる機材を使うことが重要です。

アマチュアだったら、自作でもヴィンテージ機器でも、何でも好きなものを使って好きな音を構築すればいい。しかし、評論家はそうはいきません。読者にとって、記事に書かれた操作性や音のパフォーマンスがイメージしやすく、しかもそこに再現性がなければいけない。私はそう考えて今日までやってきたし、そういう機材を使ってきました。それがオーディオ評論におけるプロだと思うんです。

じゃあ、決して安くはない 8381A で、しかもあくまで音楽制作でも使用されるスタジオ・モニターであるスピーカーで普遍性があるのかと言われてしまうかもしれないけど、最も大事なのは、Genelec のスピーカーは、最も安価なエントリー・モデルの G One から、このフラグシップの 8381A まで、エネルギー感やレンジ感は違っても、音調というか、サウンド・フィーリングは一貫しているということです。だからスタジオで大型の Genelec を使っているエンジニアが、出先で小型の Genelec をニアフィールド・モニターとして使っても違和感なく録音やミックスができていくワケだと思います。

これからこの 8381A を使って仕事をしていくのが楽しみで、とてもワクワクしています。ともかく今強く実感しているのは、自分の耳に狂いはなかったということです。プロとしての自信がこれまでに増してみなぎってきてますよ。

“

読者から信用足りうる
感覚を持ってもらう条件
として、信用できる機材
を使うことが重要です

小原由夫
オーディオ評論家

THE DETAILS

スピーカー

- 3 x 8381A
- 3 x 8351B

その他

- GLM ソフトウェア
- 9320A